

## 「発表レジュメ」

岡山大学大学院教育学研究科  
熊谷 慎之輔

## 1. 学校・家庭・地域の連携・協働の意義

## ◎連携の意義を理解し、共有する必要性(そもそもなんのために連携するの?)

→連携はあくまで手段であって、**社会全体の教育力の向上が目的**(参考文献①)

→そのためには、学校・家庭・地域の連携協力による取り組みを通して、**大人と子どもや、大人同士の「人間関係のつながり」**を豊かにすることが求められるだろう。

→こうした「人間関係のつながり」を専門的に位置づけるなら、「**ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)**」ということになる。もう少しいうと、他者への「**信頼**」、お互い様という「**互酬性の規範**」、人びとの間の「**絆**」がソーシャル・キャピタルである(参考文献②)。

→下記のみられるように、連携の効果は子どもだけではなく、**学校にかかわる大人(地域住民、保護者、教師)にもある**ということをしかりと認識すべき(学校づくりと地域づくりはリンク) →だからこそ、**たんなる学校支援の施策ではなく、生涯学習推進施策!**

## ★子どもにとっての連携・協働の意味

## ◎学校・家庭・地域の連携と子どもの学力の関連

## ○ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)と学力

→アメリカでは、近隣づきあいの盛んな地域や相互の信頼関係の高い地域、あるいは社会的活動への参加者が多い地域、つまり**ソーシャル・キャピタル**が高い州では、子どもの標準学力テストの成績が高く、双方に強い相関関係があることを示す研究成果も現れてきている(参考文献③)。

## ◎学校と地域の関係(アメリカ)

→「**地域レベルのソーシャル・キャピタルが高く、学校組織ソーシャル・キャピタルも高い場合、学校の教育効果は高まりやすい**。どちらか一方が欠損している状況でも、ある程度落ち着いた環境は維持される。そして、**双方が欠損している場合は、荒れた学校(高い停学率と逮捕率)が出現する**(参考文献④)。」

◎「都鄙格差」から「**つながり格差**」へ(わが国)(参考文献⑤)

○つながりとは、端的に言うなら、「**人間関係のつながり**」を意味する。

→「**家庭・家族とのつながり**」、「**地域社会とのつながり**」、「**学校・教師とのつながり**」

→それらが豊富なものであるとき、子どもたちの学力形成に積極的な影響を与えることが多い。

→「**地域、家庭、学校と子どもとのつながりの多寡が、今日の子どもたちの学力に大きな影響を及ぼしている**」(参考文献⑥)

## ◎さらに学力以外にも

→わが国でも、ソーシャル・キャピタルが豊かな地域(都道府県)では**不登校率**が低いことが報告されている(参考文献②)。

▼「依然として、学習支援等、教職員の専門的な領域に地域住民が入り込むことに対して負担感を抱く教職員が少なくない」(文部科学省委託調査『「学校支援地域本部事業」実態調査研究』 三菱総合研究所、2010年より)

## ★おとな(保護者・地域住民)にとっての連携・協働の意味

▼学校において大人たちは、子どものために取り組みを行っているという考え方が強いようだ。しかし、果たして、本当に子どものためだけであろうか。大人たちからは、取り組みを通して、子どもたちから逆に元気をもらい、イキイキとしてきたとの声をよく耳にする。

→これは、エリクソン (Erikson, E. H.) が中年期以降の成人に求められる心理的・社会的な課題と指摘した「**世代性 (generativity: ジェネラティビティ)**」の課題に取り組んだ成果だといえる。

→「世代性」は、具体的には、「**子どもをはぐくみ育てること、後進を導くこと、創造的な仕事をするなど、次世代への関心や養育、社会への貢献を意味し、成人としての成熟性を示す**」とされる (参考文献⑨)

→「私たちは次の世代とかかわることによって、成人としての自己が活性化されるのである。」(参考文献⑦)。つまり、世代性の観点からみれば、大人たちも子どもたちのケアをすることで自らも学び、成熟しているといえる。

→「**大人の人間は必要とされることを必要とする**」(エリクソン)

◎ここで大切なのは、連携・協働の取り組みを通して、学校にかかわる大人たち自身の学びや成長にもつながるとい点である。すなわち、学校は大人たちの発達や成熟を促すうえで重要な役割を果たす生涯学習の場と考えることもできる。

## ★おとな(教師)にとっての連携・協働の意味

○同様に、教師も保護者や地域の大人たちとのかかわりの中で発達・成熟していくと考えられる。

◎学校にかかわる地域の大人たちを「**新しい同僚**」と理解することの必要性 (参考文献⑧)

→「**チーム学校**」の必要性

★発表者の調査研究の結果から (参考文献⑦)

→「**同僚性の高い教師は、同時に学校・家庭・地域の連携協力にも積極的に取り組んでいる(相関関係なので逆の記述も可)**。」また、こうした教師の「世代性」得点も高いということがわかった。

→教師にとって同僚教師や、学校外の“新しい同僚”との間に「同僚性」を育むことが、彼らの「**かかわりの中での発達**」や「**世代性**」の成熟を支え、ひいては教師としての職能発達も促されるということができよう。

## 2. 「大人と子どもの歯車」モデルの構想

◎**世代性に含まれる大人と子どもの相互性(互いの成長のために、必要な存在同士)**

「大人は、子どもによって動かされつつ、子どもを育てることによって自ら成長し、子どもは親によって育てられることを通して、親を成長させつつ、自らも成長してゆく。この歯車のように噛み合った関係～」(参考文献⑩)

○「子どもは確かに大人によって成長を促されるが、**同時的に同じ重みづけをもって、子どもは大人を成長させる**」(参考文献⑪)

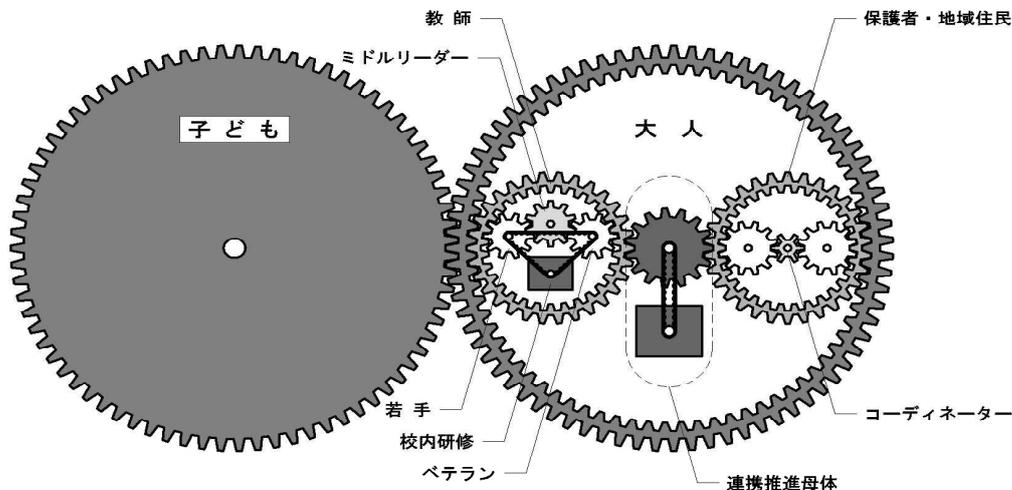


図 大人と子どもの歯車モデル

- ◎「大人と子どもの歯車」モデルのように捉えると、学校・家庭・地域の連携協力を推進する取り組みは、単に学校を支援し、子どもを良くするだけではなく、大人と子どもや、大人同士の「人間関係のつながり(ソーシャル・キャピタル)」を豊かにし、社会全体の教育力を向上させていくことに大きな意味があることにあらためて気づかされる。

このように、大人と子どもの育ちあいのためにも、学校・家庭・地域の連携協力をすすめることが重要であるが、こうした取り組みはいわば**“漢方薬”**であって、すぐに効果がでるとは限らない。しかし、だからこそ、学校・家庭・地域の連携協力をすすめる取り組みを積極的かつ継続的に行っていくことが重要であり、そのための**推進母体となる組織(チーム)の必要性**がクローズアップされてくる。つまり、学校と地域との触媒となって、取り組みを企画立案するための「協議の場(連携推進母体)」が肝要なのである。図をみても、「大人と子どもの歯車」をまわすためには、学校にかかわる大人(保護者・地域住民と教師)たちが連携の意味を共有し、協議を通して「大人同士の歯車」をかみ合わせいく必要があることが理解できるだろう。

### 3. 学校・家庭・地域の連携協力をめぐる課題

#### ①「連携推進母体」を中心にした組織づくりの重要性

- たとえば、山口県の地域ぐるみで子どもを育む「地域協育ネット」の仕組みでは、連携組織母体を「A:学校運営協議会」、「B:公民館」、「C:地域教育協議会(学校支援地域本部)」、「D:その他の組織」の4つに分類し、その推進する組織づくりについて検討している。このように必ずしも、連携推進母体は同じである必要はない。それより、市町村の考え方や学校・地域の特性によって、既存の組織をうまく活用、組み合わせ、**大人同士がチームで協議できる場の確保**が、連携による学校・地域づくりをすすめるうえで大きな鍵を握っているといえる。

☆学校運営協議会と学校支援地域本部の連携は有効な「連携推進母体」と考えられる。

- おかやま子ども応援事業(学校支援地域本部・放課後子ども教室・家庭教育支援の連携)

## ②「チーム学習」の必要性

○学校にかかわる大人同士の「対話」による「チーム学習」の必要性については、あらためていうまでもないだろう。ただし、その重要性は地域本部等の取り組みが軌道に乗り、「充実期」を迎えても確認されている。たとえば、岡山県社会教育委員の会議による「研究のまとめ」（別紙資料）によると、「**充実期**」は**取り組みのマンネリ化や形骸化を迎える時期でもあると警鐘**を鳴らしている。そのため、事業の「立ち上げ期」に始めた取り組みの見直しや、子どもや学校が抱える直近の困難な課題への対応等についての協議、つまり「チーム学習」が一層重要になってくる。たしかに「充実期」は、「立ち上げ期」に比べて、意見の対立や葛藤も少なく、一見すると順調にみえるケースが少なくないだろう。→「充実期」だからこそ活動内容の質向上を

## ③教師の意識変容

▲「新しい同僚」とはいうものの、。

→「多くの学校はそれらの人々をあいかわらず**教師の補助者（サポーター）**と考えている」のが現状であろう（参考文献⑧）。

◎こうしてみると、学校にかかわる大人たちを、「新しい同僚」と教師が理解し、彼らとどのような関係を築いていくかが、学校づくり、さらには地域づくりの成否を左右するといっても過言ではないだろう。

## ④双方向性のある取り組みが学校・地域づくりを促す

○学校・家庭・地域の連携協力というと、地域（大人）から学校（子ども）への支援を連想し、そうした取り組みに偏ってしまいがちになるが、**地域の中で子どもたちに出番や役割を積極的に設け、活躍を承認していくという学校から地域へのベクトル**も含んだ取り組みを展開していくことも大事である。双方向性のある取り組みが、「大人と子どもの歯車」をかみ合わせて、異年齢や世代間の交流をうみ、学校・地域づくりを促すことができるのであろう。→子ども（中高生）にとっては**自己肯定感や自己有用感の向上**にも

☆**学校づくりと地域づくりのリンク**からいえば、学校支援地域本部事業のねらいとして掲げられた「①学校教育活動の充実」を図るだけでなく、「②地域住民の学習成果を生かす場の拡大」や、「③地域の教育力の向上」も重要である（しかし、①に偏った展開）。

## 参考文献

- ①岡本祐子編『成人発達臨床心理学ハンドブック』ナカニシヤ出版、2010年。
- ②稲葉陽二『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書、中央公論新社、2011年。
- ③ロバート・D・パットナム（柴内康文訳）『孤独なボウリング』柏書房、2006年。
- ④稲葉陽二・大森隆・金光淳・近藤克則・辻中豊・露口健司・山内直人・吉野諒三『ソーシャル・キャピタル「きずな」の科学とは何か』ミネルヴァ書房、2014年、115頁。
- ⑤志水宏吉『学校にできること—一人称の教育社会学』角川学芸出版、2010年。
- ⑥志水宏吉編『格差をこえる学校づくり 関西の挑戦』大阪大学出版会、2011年。
- ⑦熊谷慎之輔「教師の職能発達を支え促す『学校・家庭・地域の連携協力』のあり方に関する研究」学位申請論文、2014年。
- ⑧紅林伸幸「協働の同僚性としての《チーム》—学校臨床社会学から—」『教育学研究』74（2）、日本教育学会、2007年、174-188頁。
- ⑨岡本祐子編『成人期の危機と心理臨床—壮年期に灯る危険信号とその援助—』ゆまに書房、2005年。
- ⑩西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版、1993年、101頁。
- ⑪鏑幹八郎『アイデンティティとライフサイクル論』ナカニシヤ出版、2002年。